

兵庫版道徳教育副読本

こころ はばたく（小学校1・2年）



兵庫県教育委員会

こころ はばたく 目次

しゆく川公園……………	1
長田の町にガオー！ー横山光輝ー……………	2
水くみしたよ……………	3
ゆめをもってー沖中重雄ー……………	4
アサザのさく池ー天満大池ー……………	5
ひとつになった……………	7
からすのえんどうー森 はなー……………	8
ーまいの絵ー小磯良平ー……………	10
どこんじょうだいこんのだいちゃん……………	11
生まれかわるけしきー淡路夢舞台ー……………	13
ありがとう……………	15
おじいちゃんのふえー三木市小林的ししまいー……………	16
わたしのシロ……………	18
たんばやきのふるさと……………	19
つながるいのちー朝来市糸井の大カツラー……………	21
ささべざくらー笹部新太郎ー……………	22

しゆく川公園

「公園に 行つて くる。」
たけしは 家を出て 走りました。近じよの しゆく川公園には よく あそびに 行きま
す。

「あれ？まなじい、何 してるん。」

公園の さくらなみ木で、まなちゃんの おじいちゃんを 見つけた たけしが 声を かけ
ました。おじいちゃんは 細い 木の まわりに 四角い かこいを つくつて いました。

「おお、たけしか。さくらの なえ木を うえたんや。ねが しっかり つくまでは、木が た
おれないように ささえを したり、土を ふまないように かこいを してるんや。」
まなちゃんの おじいちゃんが えがおで 答えました。

「なんで 土を ふんだら あかんの。」

ふしぎに 思った たけしが たずねました。

「土が ふまれると かたく なるやろ。かたく になると ねっこが きゆうくつになつて、
こきゆうが できなく なるんや。」

「へえ。さくらも こきゆうするんや。」

たけしは 目を ぱちくり させました。

「さくらも 生きて いるんやで。年も とるし びよう気にも なる。人間と 同じや。」
「木も びよう気になるの。」

「びよう気になつたら 木の おいしやさんに みて もらつて、手当て するんやで。」
「えっ、木にも おいしやさんが いるの。」

「そうや。でもな、びよう気にならんように、水やり したり、ひりょうを 入れたり する
んやで。なえ木だけじゃなくて、年をとつた さくらも 元気に してるかを 毎日 見て
まわつて、みんなで せ話を してるんや。」

おじいちゃんは、なえ木を ながながら 言いました。

「この一本の なえ木が 大きく なるには、人の 一生に 近い 時間が かかるんやで。」
たけしは じつと なえ木を 見つめながら、今年の 春、家ぞくで お花見に 来た とき
の きれいな さくらの 花を 思い出していました。

「そうやつたんや。」

この木が 大きく なつて いくのを そうぞうしながら たけしは 晴れわたつた 空を
見上げました。

長田の町に ガオー！ 横山光輝

「うわあっ。かっこええ！」

たろうくんは、わかまっこうえんに そびえ立つ 大きな ロボットを 見上げて 思わず 声を あげました。

たくさんの 人たちが 校しゃ 四かいの 高さ ほども ある ロボットと 同じ ポーズを とりながら、しゃしんを とっています。

「どうや、かっこええやる。」

ロボットを 見上げている たろうくんにおじさんが 声を かけて きました。

「これはな、てつ人二十八こう いうんや。リモコン そうさで 空を とんで わるい ロボットと たたかってたんやで。」

「うわあ、すごい。」

「横山光輝さんって いう、神戸で 生まれた ゆう名な 人が かいだ まんがの お話や けどな。」

「なんや。おっちゃん びっくり させんといてよ。でも、なんで こんな でっかい てつ人を この こうえんに つくったんやろ。」

「はんしん・あわじ大しんさいって 知ってるか。」

「うん。ぼくは まだ 生まれて なかったけど、ぼくの 家も、町も たいへんやったって。」

「そうやねん。でも、みんなで 力を あわせて、自分たちの 町を ふっかつ させたんやで。もっと もっと 長田の 町を 元気に しよう」と がんばったんや。どんな ことにも

まけへんで、長田の 町が すきやねん という 思いを こめて つくったんや。」

おじさんは 話しながら てつ人の ように げんこつを 高く つき上げました。

たろうくんは、力強く 話す おじさんが、てつ人の ように かっこよく 思えて きました。そして また てつ人を見上げました。なんだか とても ゆうきが わいてきました。

「ぼくも、てつ人になりたいな。」

「おっ、そうか！たのむで、み来の てつ人くん。」

おじさんは うれしそうに たろうくんのかたを ポンと たたきました。

「ガオー！」

たろうくんも 空に 手を つき上げて 大きな 声で さげびました。

水くみ したよ

地しんで 水道かんが やぶれて、だいどころや おふろ、トイレの 水が 出ないよ。

地しんが あってから、二か月 たつけど、まだ、家の 水道が つかえないよ。それで 家の 近くに みんなで つかう 水道が つけられたんだ。

でも、ぼくの 家は マンションの 八かい。水を くみに、かいだんを 下まで おりなければ ならないんだよ。

お母さんは、大きな バケツを もって、何ども 水くみに 行ってるよ。いっしょうけんめい がんばって いる お母さん。

ぼくも、ペットボトルを もって 水くみに 行っただよ。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

ゆめを もって 沖中重雄

朝から 雨が パラパラと ふって いました。けれども、ぼくは 町たんけんに 行きまし
た。

地いきの おばさんが じん社の せつ明をして くれました。じん社の よこには 大きな
石が あります。なんだろうと ぼくが 石に 書かれている 字を 見て いると、おばさん
が、

「夢(ゆめ)と 書いて あるんやで。」
と教えて くれました。

ゆめと 聞いて ぼくは 大すきな サッカーが うかびました。

「この 字を 書いた 沖中重雄先生はな、おいしゃさんになつて、人の やくに 立ちたい
と 一生けんめい べん強した 人なんや。」

ぼくは サッカーチームに 入つて います。でも、ドリブルや シュートが なかなか う
まく できない ことを 思い出し、下を むいてしまいました。

「どないしたん。沖中先生は、つらい ことや うまく いかへん ことが たくさん あつ
たんやつて。でも、毎日 がんばったんやつて。がんばる ことが ゆめを かなえる こ
とに つながったんやね。」

「がんばる ことが。」

ぼくが 言つと、おばさんは にこにこしながら

「ゆめつて すてきやね。」

と 言いました。

「そつか、ゆめか。」

空を 見上げると、きれいな にじが かかっています。

アサザの さく 池 天満大池

「わあ、きれい。アサザの かぶを もって 帰ろうよ。」

天満大池の ほとりを お母さんと さん歩いて いた かずちゃんは、水べの あちこちに さいて いる アサザの 花を 見て、うれしく なりました。

アサザは、夏に になると きゅうりの 花に 似た 黄色い 花を さかせます。水に うかんで 元気に さいて いる この 花が、かずちゃんも お母さんも 大すきでした。

アサザが よく 見える ところまで 来た とき、お母さんが 立ち止まり、

「かず、かぶを もって 帰ったり したら だめよ。」

と、言いました。

「どうして？」

かずちゃんは、お母さんに 聞きました。

「この 池に とつて アサザは 大切な もののよ。じつはね、この 池から アサザが さいた ことが あるの。」

かずちゃんは、おどろきました。

「アサザが さいちゃったの？」

「その ころね、この 池を なおす 工じが はじまって、池の 水が よこれて しまった そうよ。十年の 間に、アサザは どんどん へって 行って、この 池から さいて しまったんだって。」

かずちゃんは びっくりして、

「どうして 今は いっぱい さいて いるの。」

と、聞きました。

すると、お母さんは

「それはね、この 池に もう一ど アサザの 花を さかせたいと 考えた 人が たくさん いたから なのよ。その 人たちが アサザを さがして、何年も あちこちの 池を 歩き 回ったんですって。そして、ようやく アサザを 見つけたのよ。」

と、教えて くれました。

「でも アサザは きれいな 水じゃないと 生きて いけないでしょ。だから、天満大池に

アサザの 花を さかせたいと ねがう 人たちが、みんなで 力を 合わせて、水べを き

れいに したり、アサザの なえを うえたり して、大切に そだてて きたの。たくさん

の 人たちが アサザを まもってきたから、今年も 黄色い 花を いっぱい さかせた

アサザを 見る ことが できるのよ。」

と、お母さんは 言いました。

「そうだったのかあ。」

かずちゃんは、池 いったいに、黄色い 花を きらきら かがやかせて うかんでいる ア
サザを、もうーど 見ました。

「本当に きれいだね。」

お母さんと かずちゃんは、声を そろえて 言いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

ひとつになつた

二日目の 夜

ふたりに 一この

おにぎりが

くばられた

韓国の 人も

ベトナムの 人も

いっしょに

わけて

食べたよ

うすい もうぶが

ひとりに 一まい

くばられた

さむい夜は

外で ねると

しんまで

ひえるから

せなかと

せなかで

もたれあつて

ねたよ

韓国の

おじやを

もらつたよ

ほかほかで

体じゆうが

ぬくもつたよ

心と 心が

ひとつに なつたよ

からすのえんどう 森 はな

山に かこまれた ひょうごけんの たじまに 森はなは 生まれました。大きく なって、学校の 先生を しながら、子どもの ための どう話を 書いた 人です。これは、はなが まだ 小さい ころの お話 です。

はなは、たんぼぼの わたげを とぼしたり、からすのえんどうの ふえを ふいたり するのが 大すぎです。

学校の 帰り道の ことでした。

近じよに すんで いる まさとが、はなの ふいて いた からすのえんどうの ふえを とって おいこして いきました。

気もちよく ふえを ふいていた はなは、顔を くしゃくしゃにして まさとを おいかけました。

しかし、まさとと はなは 足が はやく、はなは おいつけません。

はなは、なきながら 家に 帰りました。

お母さんは、はなの あとを ついて きた まさとを 見て、

「ほら、まさとちゃん、こつちを 見とんなる。あんたが なきやんだら、帰るでな。ええかげん なきやみねえ。」

と、はなに 言っ て 聞かせます。

はなは 首を ふって いやいやを しました。

まさとと はなは もじもじして いましたが、近よって きて はなの 手に 何かを にぎらせ、ぺこりと おじぎをして 帰って いきました。

お母さんは、

「はな、もう なきやみねえ。いつまでも ないとなら、なした 子が わるい ことしたと 心 いためとる。」

と、 なきつづける はなの 頭を なでました。

「わるいのは、まさとちゃんなのに。」

そう 思うと、はなは なみだが 止まりません。

やっと なきやんだ はなは、にぎりしめて いた 手を ひらきました。手のひらには、さつき はなが ふいて いた ふえと、もう一つ まさとが つくった ふえが なかよく ならんで いました。

はなは、ふえを そつと 口に あてて ふいて みました。

「ピーッ、ピーッ。」

と、すんだ 音が あたりに ひびきました。

ふえを ふいて いると、なんだか 気持ち が すうつと して きました。

つぎの 日の 朝、 学校へ 通う しゅう合場じょに つくと、下を むいて いる まさとが います。はなは、まさとの そばに 行くと、だまったまま きゅっと にぎりしめて いた 手を ひらきました。

はなの 手のひらに なかよく ならんだ からすのえんどうが 一つ。

「ごめんな。」

今どは、まさとが 顔を くしゃくしゃに しました。

学校までの 道は、小さな もも色の 花を つけた からすのえんどうが 風に ゆれて いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

一まいの絵 小磯良平

まさおくんは、町たんけんで、こいそきねんびじゅつかんへ 見学に やって きました。手さげかばんには、朝 早くから お母さんが 作って くれた お弁当が 入って います。まさおくんも 一生けんめい てっだいました。

大きな へやの 中に たくさんの 絵が かざられて いました。
「あつ。」

まさおくんは 一まいの 絵に 近づきました。家に ある 本で 見たことの ある 絵を見つけたからです。

「この 絵が 気に なるの?」
立ち止って いる まさおくんに びじゅつかんの 人が 声を かけました。

「お父さんが すきな 絵なんだよ。見て いると 気もちが あたたかく なるんだって。」
まさおくんは 答えました。

すると、びじゅつかんの 人は、

「この 絵を かいたのは、こいそ りょうへいさんという 人でね。こいそさんは、大好きな 自分の 二人の 子どもを この 絵で えがいたんですよ。」
と、せつ明して くれました。

「えっ、そうなの……。自分の 子どもを かいたの。」
「こいそさんは、大好きな 子どもや 家ぞくの ことを 大切に 大切に 思って、この 絵を かいたんでしょうね。」

まさおくんは、やさしい お父さんや お母さんの えがおを 思い出しながら 手さげかばんを そっと あけて、黄色い ハンカチに つつまれた お弁当を 見ました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

どいんじょうだいこんの 大ちゃん

「あつ、だいこん。」

「ほんとだ。こんな ところに だいこんが はえてる。」

さやかと ゆうじは 学校へ 行く と中、歩道の かたい アスファルトを つきやぶって 顔を 出して いる だいこんを 見つけて、びっくりしました。

だいこんに 「大ちゃん」と 名前を つけた 二人は、

「きのうよりも、大ちゃん 大きく なったね。」

「はっぱの 数も ふえて いるよ。」

と、毎日 かんさつするのが 楽しく なりました。

びよう気で 入いんして、しばらく 学校を 休んで いた さやかは、たくましく そだつ ていく 大ちゃんを 見る たびに、大ちゃんが

「ぼくも がんばるから、さやかちゃんも 毎日、元気で 学校に 行くんだよ。」

と、はげまして くれて いるような 気が しました。二人は そうだんして、「大ちゃんに やさしく してね」と いう 立てぶたを 作って、大ちゃんの そばに おきました。

そのころには、大ちゃんは、どいんじょうだいこんの 大ちゃんとして、すっかり 町の 人 気ものになって、大ぜいの 人が 見に 来るようになって いました。

ある 日の こと、二人が 大ちゃんの そばを 通るといつもと ようすが ちがいます。

大ちゃんが だれかに ね元から おられて しまって、どこにも 見あたらないのです。

「大ちゃんは、どこへ 行って しまったの。」

ゆうじが 言いました。

「毎日、楽しみに して いたのに。」

さやかの 目から なみだが あふれました。

それから、二人は おられた 大ちゃんを 見ないように、少し はなれた ところを 通っ て、学校に 通いました。

さやかは、学校に いても、家に いても、大ちゃんのこと が 気に なります。

しばらく たって、大ちゃんの 近くまで 来た とき、大ちゃんの まわりを たくさんの 人が かこんで いるのを見つけました。二人は かけよって、そっと のぞいて みました。すると、おられた 大ちゃんが、元の 場しよに いるでは ありませんか。

おった 人が もどしたのでしょうか。でも、すっかり しおれて しまって います。

「大ちゃん、だいじょうぶかなあ。」

「また、元気に なるのかしら。」

大ちゃんは もどって きましたが、大ちゃんのこと が 心ばいで なりません。

そのとき、市やくしよのおじさんが やってきて、言いました。

「このままでは、大ちゃんは かれて しまいます。市やくしよで 大切に そだてて、元気をとりもどします。そのあと、手じゅつを して、大ちゃんの子どもたちを いっぱい 作ります。」

二人は、この話を 聞いて、顔を 見合わせて にっこりしました。

「大ちゃん、がんばれ。」

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

生まれかわる けしき 淡路夢舞台

「お母さん、お父さんは もう 出かけとんの？」

日曜日の 朝、いつもより 早く 目が さめた たかしは、お母さんに 聞きました。

「そうよ。公園に 下草かりの ボランティアに 行つとるよ。」

お父さんと キヤッチボールを しようと思つて いた たかしは、少し がっかりしました。

お母さんは すんだ あと、お母さんと おばあちゃんと たかしの 三人で 家の 近くの 公園に あそびに 行きました。

お父さんが 下草かりに 来て いる 公園です。ここは、とても ながめが よいので、遠くからも たくさんの 人が やつてきます。海から 気もちの よい 風が ふいて きます。

休けいしよの ベンチに すわつて 休んで いた とき、たかしは、一まいの しゃしんがかぎつて あるのを 見つけました。

「あれは、どこの しゃしん？」

と、おばあちゃんに 聞きました。

「ここや。」

「えっ、ここ？ぜんぜん ちがうやん。」

たかしは おどろきました。

しゃしんは、草も 木も ない 岩だらけの けしきでした。

「ここはな、ずっと むかしは きれいな 森 やつたんやけどな、土とり場になつてから、木の 一本も はえへん 岩だらけの 山に なつてしもたんや。」

おばあちゃんは、言いました。

今は、花や 木が いっぱいで、公園の 上の 方は 森に なつて います。お父さんが 下草かりに 来て いる 森です。ここが、岩だらけの 山だつたなんて、たかしには、しんじられませんでした。

「だが、そんなこと したん？」

「そりや、人間に 決まつとるがな。」

そして、おばあちゃんは、水とつのお茶を こぐりと のむと

「人間が こわして、人間が なおしとんのや。」

と、つづけました。

それを 聞いていた お母さんが、

「今日の 日曜日、公園の ガイドツアーが あるんやけど、来て みようか。おばあちゃんのこと、

たかしを さそいました。

たかしは まよいました。来週こそ お父さんと キャッチボールを しようと思っ
たからです。しかし、あの 森にも 少し きょうみが あるので ガイドツアーに さんかす
る ことに しました。

つぎの 日曜日、公園に 行くと、たかさんの 人が あつまっ いて ガイドの おじさ
んの 話を 聞いて いました。

「ここは、二十年ほど 前までは、どうぶつも こん虫も すめない 岩だらけの 山でした。
雨が ふると、にごった 水が 川や 海に ながれて 海が まっ茶色に なり、魚も とれ
なく なった そうです。」

「あの しゃしんが その 時のだ。」
と、たかしは 気が つきました。

「岩と 土だけに なって しまった この場しよを、むかしのように、みどりいっばいに す
るために、みんなで 力を 合わせて 木を うえ、森を そだてる ことに しました。そ
して、六年 かけて、みどりで いっばいの 山に することが できました。」

「むかしに もどったんだ。」

たかしの 声が 聞こえたのか、ガイドの おじさんは、

「でもな、ほんまに むかしのように すっかり 元に もどすのには、まだまだ 何十年も
かかるんやで。鳥や どうぶつや 風が はこんで くれる たねが めを 出して、長い
時間を かけて 元通りの 山に かえって いくんやで。」

と、言いました。

「どうぶつや 風が たねを はごぶの。」

たかしは、びっくりしました。

「どうぶつや 風の 力だけじゃ ない。下草が 生えたままだと、たねに お日さまが 当た
らんやろ。そうすると、せつかく はこばれて きた たねから めが 出ないからな。」

たかしは、お父さんが 下草かりの ボランティアを している ことを 思い出し、森の
方を 見ました。

「ーど こわした 自ぜんを 元に もどすには、たかさんの 人の ちえと 力と 時間がひ
つよう なんやで。」

ガイドさんの 話を 聞いて、たかしは おばあちゃんが、本当に 言いたかった ことが
わかったような 気が しました。

たかしは、あせを いっばい かけて 下草かりを している お父さんの 顔を 思いう
かべました。

ありがとう

テントの外では、お姉さんたちが、だいこんや にんじんを 山のように 切って、大きな
なべに 入れて いきました。

「何を 作って いるのかな。」

ぼくは 何が できるのか 知りたく なって きました。

お姉さんたちは、白い いきを はきながら、いっしょうけんめい 手を うごかして いま
す。テントの 外の 大きな なべから、みそしるの いい においが して きました。

へやに もどって、お母さんに 話したら、

「お姉さんは、わたしたちのために 来て くれた ボランティアの 人たちよ。さむいのに
みんなの ために しょくじを 作ってくれて いるのよ。」
と 教えて くれました。

ぼくは、お姉さんたちの 作って くれた あったかい みそしるを、のこらず 食べました。

しょつきを かえすとき、ぼくは、大きな 声で、

「ごちそうさま。」

と 言いました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

おじいちゃんのおふえ 三木市 小林のししまい

「ピーヒャラリロー、ピーヒャラ。」

にぎやかなおふえの音が、公みんかんから聞えてきます。まつりのれんしゅうがはじまったので、みんなはりきっているのです。ひろしは、ししまいのおふえをたんとうするつもりになりました。

「ピイッー。ヒャーッ。」

この日もひろしのよこぶえからはへんな音しか出てきません。いくらがんばってもいい音が出ないのです。中学生のお兄さんたちのよつにじょうずにぶくことができないひろしは、がっかりして一人で公みんかんを出ました。

「ピイッー、ヒャーッ。」

「ああ、あかん。」

家に帰って、またれんしゅうをはじめましたが、やはり、いい音は出ません。ひろしはなきそつになりました。

その時

「どつや。じょうずになったか？」

ひろしのへやへおじいちゃんが入ってきました。

「あんなおじいちゃん。ぼく、なかなかうまくぶけへんねん。そやから、あんなまつりには出られへんねん。」

おじいちゃんはにににしながらひろしのとなりにすわりました。手にはおふえがにぎわわっています。

おじいちゃんはもってきたおふえをぶきはじめました。

「ピーヒャララ、ヒャラリロー、ヒャラリロー。」

「うわあ、おじいちゃん、じょうずやな。すいちゃんか。」

ひろしははじめて聞くおじいちゃんのおふえの音にびっくりしました。

「おじいちゃんもひろしのお父さんも子どもものころししまいのおふえのれんしゅうをしたもんなや。だれでもさいしゅはへたくそや。そやけどむずかしいきょくもみんなでおふくと楽しかったぞ。」

「おじいちゃん。ぼくもじょうずにぶきたいねん。なあ、いっしゅにぶいて。おねがい。」

「わかった、わかった。ひろしのたのみやからしゃあないな。」

「やったあ。」

ひろしは目をかがやかせておふえをぶきはじめました。

「ピイッー、ヒャラヒャーラー、ヒャーラー。」

「おっ、じょうずに ふけるやんか。」

「おじいちゃんといっしょだとんだか じょうずに ふけるよ。」

「そうか。よっしゃ、おじいちゃんも、もう一回 ふいたるで。」

おじいちゃんと いっしょに ふくと ふしぎと じょうずに ふけるような 気がします。

「もう一回、もう一回。」

ひろしは れんしゅうが 楽しく なって、何回も ふきました。

「うまなっ たな、ひろし。」

「うん、おじいちゃんの おかげや。ありがとう。おまつり、ぜったい 見に来てな。」

ひろしは、ふえを きゅっと にぎりしめて、えがおの おじいちゃんを 見ました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

わたしのシロ

シロが いません。

赤ちゃんの ときから、ずっと いっしょに くらしていた シロが いません。わたしが よぶと、すぐに こたえる シロが いません。

けさの 地しんで、こわれた 家から やつこの ことで はい出た わたし。

「シロー。シロー。」

名前を よんでも、へんじを してくれません。

自分で 外へ 出たのかな。

どこかへ にげたのかな。

ひなんしよに むかう 間も、お父さんや お母さんと いっしょに、

「シロー。シロー。」

と よんで みましたが、シロは こたえません。

夜に なっても、つぎの 日の 朝に なっても、また、その つぎの 日になっても、シロが いません。

五日目の 朝、みんなで こわれた 家の かたづけを しました。

こわれた げんかんの くつばこの 下に、白い ものが 見えました。

「シロだ。」

お父さんも お母さんも わたしも、ぐったり している シロを、いっしょうけんめい たすけようと しましたが、はしらや かべが おもすぎます。

「シロー。」

きんじよの 人や、通りかかった きゅうじよたいの 人たちも てっだって くれました。

シロは、たすかりました。

わたしは、けがを している シロを ぎゅっと 抱きました。

シロは、「クーン、クーン。」と なきながら からだを すりよせて きます。

わたしの なみだは、止まりませんでした。

見ていた 人は、はく手を して いました。

たんばやきの ぶんれい

十月の 土曜日、ぼくは お父さんと とうきまつりに 行きました。

お店には、たくさんのおさらや お茶わんがありました。よく 見ると どれも 形や色が ちがいます。

「これは みんな たんばやきと 違って、ここで 作られた ものなんや。ずっと むかしから つたえられて きてる、日本でも ゆう名な やきものなんやで。」

と、 お父さんが 教えて くれました。

ここの お店の やきものは ぜんぶ 篠山市 今田町で つくられた ものだと 知り、びっくりしました。ぼくの すんで いる 町の すぐ 近くだったからです。

ぼくは、一年生の 図工の 時間に ねん土で しっほが きんぎょの きょうりゅうを 作りました。やきものになって とどいた 時、とても うれしかった ことを 思い出していました。

すると、お店の おじさんが、

「どうや、ぼく。土の かたまりが 人の 手で こう なるんやで。のぼりがまを 知ってるか。長い 土の トンネルの 中で たき木を もやしつづけると こんな 立ばな やきものが できるんやで。」

と 教えて くれました。

「のぼりがま??」

ぼくは のぼりがまを 見て みたく なりました。帰りに お父さんに おねがいで のぼりがまの ある ところに つれて行って もらいました。

道に そって たんばやきを 作る お店が たくさん あります。

「この お店は かまもとや。かまもとは やきものを やく かまが あるんやで。」

お父さんと ぼくはこの かまもとで、のぼりがまを 見せて もらう ことに しました。

「うわ、すごく、長い!」

かまの 中を のぞきながら、ぼくの きょうりゅうも 火の 力で たんばやきに へんしたのかと 思いました。

「たんばやきに きょうみを もったみたいやな。うちで 毎日 つかつとる お茶わんも たんばやきなんやで。」

「えっ、ほんま??」

ぼくは なんだか うれしく なりました。

「今どは 立くい すえのさとに 行ってみよか。小学生の とっげい教室が あって、自分で 作れるんやで。」

と、お父さんが 言いました。

ぼくは、お店で 見たような やきものを もう一ど 作って みたいと 思いました。

「うん。行って みたい。」

「たんばやきは ふるさとの 自まんや。どんな ものでも ええから 土を こねて 作って

みたら ええわ。」

と、お父さんは 言いました。

ぼくは、お母さんに でき上がった ゆのみを わたしながら たんばやきを 自まんして

いる 自分を そうぞうしました。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。

つながる いのち 朝来市 糸井の大カツラ

わたしたちは、遠足で、糸井の 大カツラの 木を 見に行きました。
山の 中を 歩いて いくと、大きな 木が 見えて きました。

「わあ、すごい。大きな。」

「でっかい 木やなあ。」

木に 近づいて みると、一本の 木では ないことに 気づきました。何本もの 木が あつまつて いました。

「なかよく かたを 組んでる みたいやな。」

みんなが、大カツラの 木を 見て おどろいて います。わたしは、

「先生、これ、何本くらい あるん？」

と 聞きました。

「八十本くらいかしらね。」

「そんなに たくさん。」

「中に入つて みましようか。」

先生に さそわれ、わたしたちは じゅん番に 木の中に入つて みました。中は、子どもが 十人くらい 入る ことができる 広さです。

「わあ、広い。まるで おうち みたい。」

わたしを かこむように 大きな 木が たくさん はえています。

「ひこばえと いうのよ。」

「ひこばえ？」

「そうよ。まん中に 一番 さいしょの 木が あつて、それは なくなった木なのよ。その 木を かこむように めが 出てくるの。それを ひこばえと いうの。もとの 木の えいようを もらつて そだつて いくの。」

「リレー みたいやね。」

「そのとおりね。いのちの バトンタッチは 二千年も つづいて いるの。」

「二千年も。すごいなあ。」

わたしは、木の 中から 空を 見上げました。

お日さまに たらされて きらきら 光る はっぱが わたしたちに 話しかけて いるよ
うでした。

おぼあちゃん
笹部新太郎

ある 春の 日、おぼあちゃんと お花見に 来た あすかちゃんは、大きくて 太い さくら
の みきに 名ふだのような ものが かけて ある ことに 気づきました。

「おぼあちゃん、これは さくらの 名前なの。」

「そうよ。ささべさくらと いうてね。ささべしんたろうさんが、大切に そだてた さくらな
のよ。ささべさんは、むかしから ある うつくしい 日本の さくらを まもって、み来に
のこそうと 一生けんめい べん強した 人なのよ。」

「すごいなあ。」

あすかちゃんは、たくさんの 花を つけた、太くて 大きな さくらを 見上げました。

「でも、せんそう中には、いろいろと つらい ことも あったんだって。」

足元に おちた 一りんの さくらを ひろい上げながら、おぼちゃんが 言いました。

「ささべさんはね、どんなに くるしい時でも、あきらめずに さくらを そだてつづけたのよ。

ほうって おいたら なくなつて しまいそうなの さくらを まもって、みんなが 楽しめる
場しょを たくさん 作つて くれたのよ。こまつた ことも 大へんな ことも いっぱい
あつたのにな。」

おぼあちゃんは、そう言いながら 一りんの さくらを そつと あすかちゃんの 手のひ
らに のせて くれました。

きれいな さくらを 見ていると、あすかちゃんは、どんな 時も あきらめずに さくらを
そだてつづけた ささべさんの 気もちが、わかつたような 気が しました。

「ささべさん、今年も きれいな お花を 見せて くれて ありがとう。」

顔を 見合わせて にっこり ほほえむ 二人の えがおは、春の 光に かがやいて いま
した。